

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
36	川崎市立玉川小学校	辰口 直美

学校教育目標	今年度の重点目標
根【粘り強く取り組む】 智【正しいこと(真理)に即して行動する】 和【協調して物事に取り組む】 ・自ら学び、考え、判断し、表現できる子 ・友達と関わりながら学ぶ子 ・自他の生命を尊重し、思いやりのある子	○新しい時代に必要となる資質・能力の育成を図るため、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善により、児童一人一人の質の高い学びを実現する。 ○他者との様々なふれ合いや体験的な学習を通して規範意識やコミュニケーション能力を育み、健やかで心豊かな児童を育成する。 ○心身の健康を育み安全を確保することの基礎的な素養を児童の発達段階に応じて育成するとともに、児童が安全で安心して生活できる環境を整える。 ○めざす学校の姿・子どもの姿を保護者及び地域社会と共有し、協働しながら、その実現に向け、学校教育活動の充実を図る。

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 コミュニケーション能力を高める教育活動を推進する。	◇学校行事やクラブ、委員会、たてわり班活動等 ◇一人一人が仲間と関わり、自己有用感や充実感をもち、ともに学び合う楽しさや喜びを醸成する。	行事や学年・学級で児童一人一人が活躍できるような場をつくり、児童が役割や責任をもって活動する姿がみられた。活動内容を工夫しながら行うことができた。	児童が主体的に取り組めるような活動を今後も計画し、達成感や充実感を味わわせることができるようにする。たてわり班活動の内容や実施方法を改善してよりよくしていく。
2 「問題解決的」「主体的・対話的」「探究学習」の視点での学習指導を工夫する。	◇学習で育てたい資質・能力、本時のねらいを明確にもった授業及び教科指導の充実 ◇校内研究の充実 ◇学年を中心とした教材研究、指導方法研究	育てたい資質・能力、本時のねらいを明確にもった授業を展開し、算数科を中心として教科指導を行った。 学年会の時間を確保し、学習計画等が確認できるように努めた。	次年度も継続して算数科で校内研究授業を実施し、授業改善を行う。 研修研究部で研修等も計画していきたい。 学年を中心として教材研究に取り組めるようにしていく。
3 ICT機器を活用した学習形態の工夫する。	◇GIGA端末やICT機器の効果的な活用 ◇情報モラル等の育成	各学年、授業でGIGA端末を積極的に使用してきた。 情報モラルについては、学習の中でその都度行っているが、計画的な部分は薄かった。	今後も効果的なGIGA端末の活用を研究していきたい。情報モラルは、児童や保護者と共に意識できるよう啓発していきたい。
4 教職員の指導力向上による確かな学力の定着を図る。	◇校内研究の充実 ◇学年を中心とした教材研究、指導方法研究等(教職員同士の同僚性を強める。)	育てたい資質・能力、本時のねらいを明確にもった授業を展開できるよう、算数科を中心として教科指導を行った。 互いの学習計画等が確認できるように学年会の時間の確保にも努めた。	学年会等で学習計画や授業展開の情報共有を行い、よりよい授業実践に繋げる。 校内研究の算数科を中心として各教科等の授業改善が行えるようにする。
5 子ども一人一人の活躍の場をつくり「自己有用感」を育てる。	◇学校行事やクラブ、委員会、たてわり班活動等	行事や学年・学級で児童一人一人が活躍できるような場をつくり、役割や責任をもって活動する姿がみられた。自己有用感や充実感を醸成できる活動内容を工夫しながら進めていくことができた。	今後も活動の目的を明確にし、継続して取り組んでいく。教員が成果や課題などを振り返り、次に生かせることができるようにする。
6 目標や意欲、興味・関心をもたせ、友達と協力しながら粘り強く活動に取り組ませる。	◇学校行事やクラブ、委員会、たてわり班活動等 ◇校内研究(算数科)	ペア・グループ活動など児童が意見交流する場を作り、関わり合いながら学ぶ時間をつくるように努めた。一人一人が仲間と関わり、自己有用感や充実感をもち、ともに学び合う楽しさや喜びを醸成できる活動を行ってきた。	児童一人一人の課題やよさを把握し、ともに学び合う楽しさや喜びを醸成できるような教育活動を行う。教員が成果や課題などを振り返り、次に生かせることができるようにする。
7 いじめ未然防止・早期発見・解決に全教職員が取り組む。	◇「玉川小スタンダード」・「教育活動ガイドライン」 ◇道徳教育の充実 ◇共生*共育プログラム及び効果測定の実施 ◇支援教育Co中心とした支援教育の体制づくり	児童支援部会を中心に充実を図ってきた。 共生*共育プログラム及び効果測定2回を実施した。効果測定の結果を分析し学級経営に生かすようにした。 支援教育Coを中心として、教育相談や児童支援等を行ってきた。	今後も打合せや児童支援部会で気になる児童について継続的に報告して児童理解に生かす。 共生*共育プログラム及び効果測定、道徳教育をしっかりと行う。

8	児童の成長を支える教育相談や支援体制の充実を図る。	◇支援教育Co中心として在籍学級、保護者、専門家等と連携し、個々の課題に応じて組織的な取組 ◇職員打合せ等で情報を共有	支援教育Co中心として個々の課題に応じて組織的に取り組んできた。 打合せ等で児童理解の情報の共有を行った。	情報共有を大切に、児童の状況を把握し支援にいかせるようにする。 必要に応じて支援会議を開催する。
9	安全に関する情報を正しく判断し、行動に結びつけるための指導の充実を図る。	◇「玉川小スタンダード」・「教育活動ガイドライン」 ◇安全対策、安全点検、安全指導の充実 ◇事故やけが等は事実確認をしっかりと行い、丁寧な対応	避難訓練等を実施し、学校全体での安全確保について確認する機会を設けた。 安全について全児童に関わりがあるものや緊急性があるものはすぐに指導等を行った。 けが等は、事実確認や状況把握を行い、早急に対応すように努めた。	「玉川小スタンダード」や「教育活動ガイドライン」を見直しよりよくしていく。 児童が安全な学校生活を送ることができるよう、気づいた事は学級指導等行う。 避難訓練や防犯訓練など、計画的に実施する。
10	心身の安心・安全が感じられる環境の整備に努める。	◇丁寧な言葉遣い、挨拶の励行等 ◇人権尊重教育の推進 ◇教育活動全体を通じて、生命尊重、規範意識等が育つ道徳教育の充実	教育活動全体を通じて、挨拶や言葉遣いなど具体的な場面で繰り返し指導することや、命の大切さや人権意識について児童に伝えてきた。 児童から発信されたあいさつ運動の計画実施などもあり、よい関係をつくることの一助になった。	教職員が人権尊重の意識をしっかりともち、児童に関わっていく。今後も教育活動全体を通じて具体的な場面で繰り返し指導する。
11	防災教育推進校としての取り組みを進める。	◇避難訓練	これまでの避難訓練に垂直避難などを加え、昨年度とは違う視点も入れるようにした。	防災のガイドラインの見直しや、安心安全に教育活動が行えるようにする。
12	保護者や地域社会と連携して児童を育む。	◇地域の人材を活用した授業等 ◇学年・学級懇談会等での共通理解 ◇PTAとの連携協力 ◇関係機関との連携	地域の方々、店、工場、警察署、消防署等の協力を得て、児童が学習内容を深めていくことができた。 保護者会等で教育活動や児童の支援について共通理解を図るように努めた。 地域の見守り方やPTA活動委員の方から児童の登下校の様子を伺い、状況の把握に努め児童指導に生かした。	今後も地域の人材を活用を工夫した授業等を計画できるよう努める。 保護者会等で教育活動や児童の支援について共通理解を図るようする。情報モラルは、児童や保護者と共に意識できるよう啓発していく。 今後も地域の見守り方やPTA活動委員の方から児童の登下校の様子を伺い、状況の把握に努めるようにする。
13	保護者や地域に向けて教育活動について発信をする。	◇学校便り、学年便り等の発行、HPの更新 ◇学校案内の作成と配付 ◇学校行事や授業の公開	学校ホームページを毎日更新して学校生活の様子を発信した。学校だよりや場合によっては臨時で学年だよりを発行した。ミマモルメの活用も行った。 授業参観、懇談会、面談、学校説明会・報告会等を行いつつ、教育活動への理解が得られるようにした。	ホームページは引き続き充実させる。 学校だよりの発行、ミマモルメの活用は今後も工夫して行う。 授業参観等、保護者の方が来校する機会を計画的につくる。
14	学校経営等の改善に学校評価を生かす。	◇学校評価の活用 ◇児童、保護者、教員のアンケート実施 ◇学校運営協議会、学校説明会・報告会での報告	学校運営協議会を3回開催し、意見交換や授業参観を実施した。 学校評価アンケートを児童・保護者・教員に実施し成果と課題を振り返った。	アンケートの結果を分析し、よりよい学校づくりに生かしていく。次年度もアンケートを実施を計画する。 学校運営協議会を行う。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
保護者の学校評価アンケート結果をみると、本校の教育活動について「そう思う」「大体そう思う」の肯定的な回答が多く、保護者の皆様に概ね本校の教育活動をご理解いただけたと考えている。児童についても「そう思う」「大体そう思う」の肯定的な回答が多くあり、学校生活を楽しく送っている様子はうかがえる。しかし、否定的な傾向の回答もあるので、肯定的な回答の数値に安心することなく、引き続き、毎日が楽しいと思える学校づくりのために、教職員が取り組んでいきたい。学校運営協議会の委員から、「教職員は取り組んできたことに自信を持ってほしい。」との意見があった。取り組んできたことに自信をもちつつ、成果として一歩前進してできるように今後も努めていきたい。	今年度、モジュール学習や行事など教育活動を工夫しながら学校教育目標を達成できるように努めてきた。学校の教育活動について「児童・保護者の学校評価アンケート」は肯定的な回答が多かった。しかし、不登校、行きぶりの児童がいるので、どの子にとっても学校が安心していられる居場所になるように引き続き考えていく必要がある。そのためには、授業改善は欠かせないものである。校内研究を通して、学習方法や学習形態、学習環境等を工夫改善するなど、学び続ける教員集団にしたい。さらに、支援教育の充実も大切な視点である。不登校や行きぶりだけでなく、個別に支援が必要な児童等について支援教育コーディネーターを中心に、支援体制を整えてきた。今後は、不登校の未然防止を意識して、児童が安心して過ごせるような学級風土を作っていく研修も必要である。次年度もよりよい子どもの成長のために、保護者や地域と連携し、共通理解を図りながら学校教育を進めていきたい。